

赤土の大地で句を詠む心
～パラグアイと日本を繋ぐ歌人達～

田中（松宮）クリスティーナ
（在パラグアイ日本商工会議所）

「長雨で 私の靴がカビいてる」

私が小学校高学年の頃、出身地であるパラグアイの南部、対岸はアルゼンチンという国境の街、エンカルナシオンで初めて俳句に出会った。そして俳句教室初日先生から朱の三重丸をもらったのが冒頭の句である。

エンカルナシオンは、イタプア県の県庁所在地で、戦後移住者の多くが初めてパラグアイの地を踏んだ町である。1956年、17歳で移住して来た母は、日本からアルゼンチンの首都ブエノスアイレスまで40日程かけて船で渡航し、そこからは汽車の硬い板張り椅子に座って2日かけてエンカルシオンに到着したと言う。豚や馬、牛が歩き回り、家らしきものがまばらに見え、小屋のような駅に降り立った時、思わず「町はどこ？」と聞いた。「ここが町の真ん中です」と出迎えの移住の先輩から言われ、ショックを受けたそうだ。

赤土で知られる肥沃な土地を有し、今は県内にチャベス、ラパス、ピラボと、エンカルナシオン市周辺に日本人、日系人居住地がある。既に60年以上の移住の歴史を持つ地域である。2020年にはJICAパラグアイ事務所の協力によりエンカルナシオン日本人会が「パラグアイ日系アイデンティティセンター」を設立し、イタプア県を中心とした戦後移住の歴史をビジュアル化させた立派な資料館がある¹。尚パラグアイへの日本人移住は1936年のラ・コルメナへの入植から始まり今年で86年目を迎える。

さてそのエンカルシオン市で幼い頃、家から近い市内唯一の（そして多分一番古い）日本人が営む「小田旅館」があった。今年100歳になられた「小田のおばあちゃん」は当時、旅館を切り盛りする50代の世話好きのおかみさんだった。旅館に俳句の先

生が滞在しているので（滞在目的は本職のビジネスであった）折角だから俳句の勉強会をしましょう、と近所の日本人に声をかけた。そして 12～3 歳だった私は大人に混じってその勉強会に加わった。読書が好きな子だから、と母が私を参加させた。嫌がらず通えたのは教室の終わりに小田のおばあちゃんが出してくれたお茶とお菓子が楽しみだったからだが、今思えばとても貴重な経験だった。時々和服姿で指導してくれたその先生が任務終了に伴い帰国された時点で、その俳句教室は終わった。

その後俳句とは縁も無く 50 年の歳月が過ぎ、新型コロナウイルス感染防止対策としての隔離が必要な時代となった。感染リスクを最低限に抑えるため、2020 年当時 81 歳だった母は実家で一人暮らしを余儀なくされた。そして長女の私を筆頭に娘三人は母と SNS で毎日交信するようになった。

そんな母は高齢者の会「長寿会」の月報や年会報に、会員の皆さんが投稿している俳句や川柳を読むのを楽しみにしていた。そして頭の体操と称し、自分も俳句の真似事を始めた。しかし会報に投稿するほどの勇気も自信もなく、娘達に挑戦して来た。

「あなたたちも書いてごらん。みんなでチャレンジしようよ」と。そして

「やれやれ」と苦笑しながらも母のモチベーションを保つため娘達も付き合う事にした。

「季語」を使う、などルールは無視してかろうじて言葉は五七五に合わせた第一回目のやりとりがゲーム感覚で始まる。

母 「春かすみ コロナに負けず 花一輪」

「八十の 手習いピアノ ボケ防止」

娘達返信 「コロナ禍の 春風にのり 歌心」

「うちの母、コロナのお陰で テクノママ」

「マイママに 座布団 3 枚 よく出来た」

スマートフォンの画面が拍手の絵文字で埋まり、俳句とも川柳とも言えないこのやりとりに笑い、元気をもらい、母娘の歌のやりとりが始まった。

9人兄弟の末っ子の母は親の反対を押し切って高校を中退し、兄夫婦について移住した。その兄が生前長い期間川柳を作っていた。父方の叔父もまた、1968年のチャベス婦人会1周年記念紙「つどい」に載せた短歌が当時発足したばかりの邦字紙「パラグアイ新聞」に転載されたという。

菜の花の 草むらにありてたたずめば 拾年(十年)の昔夫(つま)作りしと聞くⁱⁱ

自家の畑から帰り道、草むらの中に菜の花が咲いていて立ち止まって、珍しい日本の菜の花がこんなところでなぜ咲いているのだろうとうずくまっていると、夫がきて妻より6年早く入植した頃はどんなものがこの国で売れるのか試行錯誤した作物の一つに菜の花があった。利益にはならずとも10年も雑草となって踏みつけられても力強く強かに生きている様を移住初期の想いを詠ったものという。

パラグアイ新聞は1983年頃に廃刊となっている。

1980年に全国版邦字新聞「日系ジャーナル」が創刊されたⁱⁱⁱ。母の兄はそこに川柳を投稿していたという。「日系ジャーナル」は「読者の欄」なるコーナーを開設しており、そこには実名またはペンネームで川柳や俳句が投稿されていた。そして、時と共に地域での句会や勉強会が誕生していったようである。

川柳は「斜眼子」や「林夢」なる方の作品がほぼ定期的に掲載されていた。特に「斜眼子」さんは「時事川柳」を実に15年近くその時々々の政治や経済に「一言」申している。

コルチョンの 貯金がいいと お婆さん^{iv}

習うより 慣れろの妻の スペイン語^v

コルチョンとはマット(布団)。1995年にパラグアイで銀行倒産が相次いだ時、貯金は銀行よりコルチョンの中に隠すべし、と庶民の間で言われた。

そのうち紙面では川柳より俳句が盛んになった。俳句は多くの女性も参加して「アマンバイ俳句会」「アスンシオン俳句会」など句会が誕生し、日系ジャーナル紙の

「読者の欄」は賑やかになっていった。アマンバイとはパラグアイ北部のブラジルとの国境の県、そしてアスンシオンはパラグアイの首都である。

1995 年半ばには「ラパチョ俳句会」のコーナーが誕生し、第一回目から、毎回番号が打たれ、2014 年半ば頃までパラグアイの各地在住の方々から俳句が寄せられている。そして実に 20 年近く、俳句という日本の歌を通じて、皆さんは南米パラグアイの季節を愛で、自然に喜び又は嘆き、言葉で遊び、句友と集い、競い勉強し、そして故郷・日本と気持ちを繋げていたのかもしれない。句を発表されている方々のほとんどが母の世代で、一世（日本生まれ）であることが伺える。そして時の経過とともに多くが遺作となってしまった。その方々は幼少か 10 代に移住し、周りの全てが異文化の中、親と共に森林を切り拓き、寝る間も惜しんで赤土を耕し、農作物を作り家庭を築いた。そして子供達が一人前となりやっと世代交代が出来た時、気持ちにも時間にも経済的にも余裕が出来、自分の言葉で表現できる俳句などを詠む事に楽しみを見出したのであろう。20 年近く、コンスタントに投稿されている方もいて、その句を通して皆さんの気持ちや情景も伝わってくる。お孫さんが生まれたんだなあ、大豆は豊作で良かったなあなど。

パラグアイだからこそ映し出される情景もある。句を通じて詠む方も、読ませていただく方も同じ移住者同志の苦楽や発展、ドラマを共有しているように思う。私の独断で紹介させて頂くのは憚れるが「日系ジャーナル」紙面での「ラパチョ俳句会」の中からパラグアイだからこそ詠めた句を紹介してみたい。

冬深し 濡れて朱を増す 紅ラパチョ^{vi}

開拓は トマト栽培や ルーレット^{vii}

ラパチョはピンクの花が咲く桜によく似たパラグアイの風景にはなくてはならない木である。春先に咲く花は桜よりダイナミックであるが、日本人には故郷と心を繋ぐ花であるように思う。また、約 60 年前日本人が始めたトマト栽培により現地社会にジャガイモと玉ネギ以外の野菜を普及させた。そしてそのトマトをアルゼンチンへの輸出を実現させ、トマト＝日本人と言われた。農業は天候という個人の意思

で管理不可能な状況に左右されるため、一種の「博打」とも言われている。だから、
というわけではないが、その後大豆などで大当たりの年には植え付け・収穫の緊張感
から解放されるためかカジノで息抜きをする人がよく見られたそうだ。

春ちかし 半世紀経て 里帰り^{viii}

冬服で 原爆投下 お祈りす^{ix}

太鼓打つ 音に誘われ 盆踊り^x

50 年経って叶った里帰りでは浦島太郎気分と話した方がいた。各移住地で開催され
る盆踊りは日本食屋台などがあり、現地の皆さんにも楽しんでもらえる行事の一つで
日本とパラグアイ文化交流の場でもある。

そして冬が終わりに近づいてラパチョの花が満開の 8 月 15 日の終戦記念日には、常に
こちらのメディアも取り上げてくれる。決して繰り返してはならない人類最大の悲劇
として。またそこから立ち上がり復興した日本の逞しさへの敬意。パラグアイには広
島県出身の方も多い。

卵酒 浮かんで消える 母の顔^{xi}

秋さびし 聞きし句友の 墓標かく^{xii}

幾つになっても母親は特別な存在。また墓標を書いたという方は今年 3 月に 93 歳で
永眠された。

外国（とつくに）に新米食（はめ）り三世代^{xiii}

秋燈や 異文化談義 祖父と孫^{xiv}

パラグアイには日本の昔の良い習慣が残っていると言われる。その一つが三世代同
居などの家族の在り方である。特に農家では当たり前になっているが、ご高齢となっ
た方達はこうして孫と戯れ、みんなで食卓を囲み自分達で栽培した新米の炊き立てご
飯は一段と美味しいであろう。

満緑の カンポで草食む 牛の群れ^{xv}

新豆腐 大地のめぐみ 輝いて^{xvi}

南米の 移住同伴 柿の種^{xvii}

カンポとはスペイン語で草原、田舎の土地。田舎の風景は、どこでも牛を見ることが
ができる。柿は KAKI として知られ、ハポネ（日本人）の果物として知られる。そして

大豆がよく語られるのは、日本人が大豆の不耕起栽培に成功し国の経済に大きく貢献した経緯からだ。また豆腐は今では TOFU としてスーパーなど店頭で並んでいる。今や日系社会は農業だけでなく、牧畜の生産にも参入している。この国は世界 4 番目の大豆輸出国、牛肉輸出国としては 7 番目である。その中で如何に日本人移住者とその子孫がこの国の経済を支える役を担っているかが伺えると思う。お陰で国民も政府も非常に親日国である。

俳句や川柳は先にも述べた「長寿会」の会報にも載っている。パラグアイ日系老人クラブ連合会が発行している「長寿会」は各地区の月会報と年に一度の特別号会報を発行していてそこには、実に多くの俳句、川柳、短歌や詩、エッセイや回想記などが寄せられている。

2018年開催の第2回パラグアイ・シルバー川柳、入選最優秀作品が

無農薬 そういふあなたは 葉漬け^{xviii}

1970年代に「花嫁移住」してきたセニョリータ（お嬢さん）の事を句にした JICA パラグアイ事務所所長賞の受賞作品が

出迎いの 花婿写真と 違う人^{xix}

そして営農を始めた多くの方の力強い味方であった JICA の融資

「オイ行くぞ、お声かかるは 融資の日」^{xx}

奥さんを「おーい」としか呼ばないので現地の人夫は「おい」が奥さんの名前と思っていた、とのコメントがある。

2020 年度シルバー川柳入賞作

「開拓で 鍛えた体 まだ元気」^{xxi}

これらのような俳句や川柳を詠めるのは、苦労はあっても既に此処がもう一つの故郷となっているからであろうか。

この長寿会年会報、今年 2022 年で第 40 号を迎えるが編集される方も 70 歳代である。日系組織の使用言語も「日本語だけ」から、「日・西語両言語」となって等しい。そして今はスペイン語を母語とする日系二世が中心となりつつある。それは世代交代の自然な成り行きだと実感する。大切なのは時代に適応し、日系社会の各組織

が持続できることかと思う。そして言葉も含め日本の文化・習慣の継承も大きな課題であろう。長寿会にはぜひこれからも多くの方の声を届ける「会報」の発行を続けてほしいと願ってやまない。

若い世代は言葉で心を表現するより動画などビジュアル化された表現がメインとなっている今、少ない言葉で大きな和の心を詠み続けるパラグアイの歌人達に心から敬意を表したい。

引用

邦人新聞「日系ジャーナル」印刷版

2019年度長寿会第37号及び2020年度会報38号

ⁱ<https://identidadnikkei.org.py/>

ⁱⁱ チャベス移住地在住、叔父松宮鎮男の回顧録

ⁱⁱⁱ <https://nikkeijournal.blog.fc2.com/blog-category-12.html>

^{iv} 1995年6月30日 日系ジャーナル紙 「時事川柳」11頁、斜眼子 作

^v 1999年8月31日 日系ジャーナル紙 「時事川柳」13頁、斜眼子 作

^{vi} 2005年8月31日 日系ジャーナル紙 「ラパチヨ俳句会第124回」16頁、大石ともみ作

^{vii} 2010年2月28日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第178回」11頁、大石三夫作

^{viii} 2014年11月15日 日系ジャーナル紙「らぱちよ俳句会第233回」12頁、小松八千代作

^{ix} 2009年8月31日 日系ジャーナル紙「パラチヨ俳句会第172回」12頁、大石三夫作

^x 2010年5月31日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第181回」12頁、武藤紀子作

^{xi} 2004年7月31日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第111回」16頁、真鍋美代子作

^{xii} 2013年5月31日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第216回」12頁、岡本照子作

^{xiii} 2010年6月30日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第182回」12頁、武藤紀子作

^{xiv} 2013年4月15日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第215回」12頁、大石三夫作

^{xv} 2004年3月31日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第107回」16頁、横山幸子作

^{xvi} 2005年3月31日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第119回」16頁、村岡美恵子作

^{xvii} 2013年5月31日 日系ジャーナル紙「ラパチヨ俳句会第216回」12頁、大石三夫作

^{xviii} 2019年度パラグアイ日系老人クラブ連盟 長寿会会報第37号92頁、矢内めい子作

^{xix} 2019年度パラグアイ日系老人クラブ連盟 長寿会会報第37号60頁、久保田誠作

^{xx} 2019年度パラグアイ日系老人クラブ連盟 長寿会会報第37号60頁 久保田誠作

^{xxi} 2020年度パラグアイ日系老人クラブ連盟 長寿会会報第38号95頁 伊東京子作